

評・三浦 佑之 (古代文学研究者)
立正大教授

神戸を出た客船のデッキから夕陽を見ながら瀬戸内海を西に向かい、朝早く別府港で待っていた亀の井バスに乗り、やさしいガイドさんに案内されて地獄めぐり。バスの中では、大ヒット中の舟木一夫「高校三年生」と「修学旅行」の大合唱——ほぼ半世紀も前の、わが修学旅行をなつかしく想い出しながら本書を手にした。

別府の絵はがきを一万枚も所有する古城俊秀氏のコレクションから600枚あまりを選びめぐり、若い研究者が、内容に従って分類し解説を加える。本の小口と天地を赤く染めた怪しげな装いが、古めかしい写真にとってもあう。絵はがきに遺された時代は明治末期から昭和初期、同じ場所を写した写真でも町並みは変化しており、活気のある温泉街の雰囲気をよく伝える。

古い絵はがきの楽しさは、映り込んだ風景の中に思いもよらぬ発見があることだ。通りを歩く男は背に大きなトランクを背負い、旅館の看板にビリケンホテルの文字がある。木造のはずの三階建て四階建ての巨大旅館が並ぶ。湯船の中の写真は、どれも男や女で大混雑(やらせではないと思うが、こんなだったのか)。人物がポーズをとって澄ましている写真では

温泉街の移ろい伝える



血の池地獄(明治～大正中期)

なく、自然の町並みを写した風景に時代が封じ込められる、車にも電車にも服装にも。それが絵はがきの魅力なのだと改めて気づいた。

もちろん本書は、なつかしい別府だけを見せたいのではない。温泉の町がどのように発展しどう変容したかを跡づけようとする学術的な本でもある。しかし著者の意図とはべつに、個々の絵はがきは自らを鮮烈に主張する。

つい先日、文化審議会が「別府の湯けむり・温泉地景観」を重要文化的景観に選定するようになり、文部科学相に答申したという記事を目にした。なるほど、別府という温泉地は、文化的景観と呼ぶにふさわしいところだと思った。

◇まつだ・のりこ 東京大大学院学術支援専門職員。

絵はがきの別府

古城俊秀 監修 松田法子 著

左右社 3500円